

秋の月

月が一番美しいのは秋だ、ということは多くの人が認めるところでしょう。季語でも、単に「月」と言えば秋の月を指すそうです。旧暦8月15日が十五夜で「中秋の名月」、旧暦9月13日が十三夜で「後の月」と言われ、これらの名月を愛でる風習が日本の各地に残っています。空気が澄み切った秋の空に、浮かぶ月はしっとりして幻想的な雰囲気を醸し出し、想像力をかき立てます。日本最古の物語と言われる「竹取物語」で、かぐや姫が月に帰って行くのも旧暦8月の満月の夜です。

今年の十五夜（9月8日）はお天気もよく、高松市内においてもあちこちでお月見が楽しまれたようです。栗林公園の掬月亭で開催された観月会に参加した知人によると、空の月がきれいであったことはもちろん、和船に乗り、見た南湖の水面に映った月がまた風情があり、名月を何倍にもして楽しめて良かった、とのことでした。まさに「水を掬すれば月手に在り」という言葉から付けられた、施設の名のとりの趣のあるお月見となったようです。ちなみに、京都の観月の名所で詠まれた崇徳上皇の御製に「うつるとも月もおもはず うつすとも水もおもはぬ 広沢の池」という歌があります。水に映った月は、「無心の境地」を象徴するもので気分を落ち着かせます。

十五夜の次の日は今年三度目のスーパームーンでした。月が地球に近づき大きくなるスーパームーンはほぼ毎年見られますが、今年ほど接近するのは、次は20年後になるということで、非常に貴重なものでした。また、10月8日には皆既月食も各地で観察することができました。

月は地球の唯一の衛星で、その存在は潮の満ち引きなど物理的な現象にも影響を及ぼしています。その月に人類が最初に降り立ったのが1969年。あれから45年が経過し、月に関する科学的知見は大きく進歩しました。でも、日本人が秋の月を眺め、愛でる気持ちというものは、かぐや姫の昔からあまり変わっていないように思います。

秋も深まってきました。月をイメージした音楽でも聴きながら、秋の夜長をゆったりと過ごしてはいかがでしょう。私が選ぶとすれば、ドビュッシーのピアノ曲「月の光」か、ジャズの名曲「ムーンライト・セレナーデ」といったところでしょうか。